

3 緑のまちづくりのテーマ

市内には温帯林から亜寒帯林に移行する地帯に位置する森林の景観が大都市近郊に残された大面積の平地林として世界的にも貴重な野幌原始林を有するほか、市街地の北側を悠然と流れる石狩川をはじめ、大小42河川を有するなど恵まれた自然環境にあります。

しかしながら、市街地における樹林地の割合などの数値を見ると必ずしも緑豊かな状況ではないことが課題となっており、このような課題を克服して生活環境意識や緑の状況のさらなる向上を図り、緑豊かなまちとして後世に引き継ぐことが私たちの使命と考えます。

この計画を進めていくにあたっては、「えべつ未来づくりビジョン（第6次江別市総合計画）」で示されている将来都市像「みんなでつくる未来のまち えべつ」の考え方と、これまで進めてきた「原始林と石狩川にいだかれたふれあいのまち」の精神に従って、国や北海道ほか関係する機関や団体と連携を図りながら、次のような緑のまちづくりのテーマによって市民と協働で緑のまちづくりを進めていきます。

「緑のまちづくりのテーマ」の設定にあたっては

“みどり” 原始林

江別市を代表する緑といえば、なんといっても「野幌原始林」です。この計画策定の際の市民会議では「我が家の庭も原始林」というキャッチフレーズがアイデアとして出ました。これは原始林の緑が街までつながることで、原始林に生息する鳥が緑を伝わって我が家の庭までやってくるような、江別市の緑の将来像の1シーンを想像したものです。

水

江別は石狩川をはじめ、42の河川の流れるまちです。市民会議では「江別は川のまちである」ということを意識したまちづくりを行なっていくべきという意見が出ました。河川だけでなく湖沼、噴水、公園の水辺など身近にさまざまな潤いを感じられるまちを目指して「水」としました。

江別らしさ (景観)

市民会議においても「江別らしい緑」あるいは「北海道らしい緑」について話し合いがなされました。江別らしさを醸す要素として野幌原始林、鉄道林、レンガや農村景観のなかの耕地防風林、あるいは大学のキャンパスの景観があげられ、これらは江別の歴史に培われてきた緑であり景観であることから、これからの緑のまちづくりでは、江別特有の緑を守り歴史的な連続性として次世代へつないでいくべきという考えが「らしさ」という言葉に込められています。

「江別らしさ」：レンガと花や緑が織り成す緑豊かな市街地、耕地防風林と農地が織り成す農村

“ほっ”と するまち

札幌市に通勤、通学する市民が多いなかで、JRで江別に帰って来て駅に降り立つ時に、鉄道林などの緑豊かな風景が何となく“ほっ”とする安らぎを与えてくれる。また、休日に緑豊かな公園などを散歩するとゆったりとした気分になるといった、癒される緑のまちづくりをもっと進め、「ついのすみか」としての江別を目指そうという想いがこの言葉に代表されています。



緑のまちづくりのテーマ〈理念〉

“みどり” 「原始林・水・らしさ」を感じる ほっとするまち江別



テーマを実現するための方針

身近な緑が 原始林へ つながるまち

市域の南西部に位置する野幌原始林は面積約 2,053ha で、江別市の市域内にその大部分の約 1,841ha があります。公園や緑道、街路樹や庭の緑など身近な緑をはぐくみ、原始林の大きな緑とネットワークするまちを目指します。

水辺を実感 できるまち

江別市は石狩川と千歳川、夕張川などが合流するところにあり、市内に 42 河川を有する川のまちです。大きな河川の豊かな水と緑に抱かれたまち、街なかを流れる身近な河川、潤いをもたらす噴水や公園の水辺など、水と緑に親しむことのできるまちを目指します。

江別らしさを 生かした 緑のまち

野幌原始林や鉄道林、石狩川は江別を代表する緑です。郊外の耕地防風林のある農村風景も江別の原風景といえるでしょう。これらの緑をまもりながら、牧歌的な大学のキャンパスやレンガ建造物などの景観資源と一体となって「らしさ」を感じる緑のまちを目指します。

今ある緑を 子どもたちへ

野幌原始林や街なかに残る自然、防風林のある農村の原風景や河畔林など、先人から引き継いだ豊かな緑はわたしたちだけのものではありません。このような緑は絶やすことなく、一層豊かなものにして子どもたちへ託します。